

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 4 日現在

機関番号：13901  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2013～2016  
 課題番号：25370429  
 研究課題名(和文) 日韓語の文末連体・名詞化構文の機能類型論的研究：語用論的機能と構文間の連続性  
  
 研究課題名(英文) A functional typological study of sentence-final noun modifying and nominalization constructions: Pragmatic functions and cross-constructional continuity  
  
 研究代表者  
 堀江 薫 (Horie, Kaoru)  
  
 名古屋大学・国際言語文化研究科・教授  
  
 研究者番号：70181526  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、SOV語順という共通性を有する日本語と韓国語において、語彙的な意味を有する名詞を主要部とする「文末連体構文」(例：[突然開く]ドア。)と、機能的・関係的な意味を主として表す文法化した名詞を主要部とする「文末名詞化構文」(例：[突然ドアが開いた]の。)を比較した研究である。具体的には、両者の構造、語用論的機能の平行性と相違点を機能主義的な言語類型論の観点から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study presents a functional typological analysis of sentence-final noun-modifying constructions (e.g. [Totuzen hiraku] doa. 'The door which opens suddenly.') and sentence-final nominalizations (e.g. [Totuzen doa ga aita] no. 'That the door opens suddenly. (I just realized)'). Both of these constructions have occur in sentence-final positions in Japanese and Korean which have the same SOV word order. This study prented a functional typological analysis of these constructions in Japanese and Korean and has revealed both parallelism and differences in structures and pragmatic functions.

研究分野：言語類型論、対照言語学

キーワード：文末連体構文 文末名詞化構文 機能類型論 語用論的機能 連続性 日韓語 文法化 構文化

1. 研究開始当初の背景

日本語の文末には「の(だ)」「こと(だ)」「もの(だ)」「わけ(だ)」のような「(形式)名詞(+コピュラ)」の名詞述語文が生起することが多い。また、このような構文とは別に、「現場は遮断機のない踏切。」のように報道や広告などのジャンルで語彙的な意味を有する名詞が修飾節を伴う形で単独で文末に生起することも少なくない。述語の生起する文末の位置にこれらの名詞的表現が用いられることは日本語の「名詞志向性」の高さを示しているとされる(金 2003, 新屋 2014 等)。

しかし、日本語の名詞志向性に関する研究はこれまで前者のような「機能語化した名詞(+だ)」が文末に生起する用法に特化して行われてきており、後者のような「語彙的な意味を有する名詞」が文末に生起する用法を、前者の「名詞述語」と平行的に捉える試みはなされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、「の」「こと」「もの」「ところ」「わけ」のような文化化した名詞(形式名詞等)を、文を名詞化する機能を持った形式と捉え、名詞化された節とともに単独またはコピュラを伴って生起した構文を「文末名詞化構文」と呼び、「踏切」「ドア」「カップ」のような語彙的な意味を有する一般名詞が単独で修飾節を伴って文末に生起した構文を「文末連体構文」と呼ぶ。その上で、いずれも「名詞」的な要素が文末の述語の位置に生起するという共通性を有する両者の機能的な平行性と相違点を、韓国語の類似形式との対比を通じて明らかにすることを目的として行われた。

3. 研究の方法

本研究は、機能主義的な言語類型論と文法化研究の知見を援用し、対照言語学、語用論の方法論を組み合わせた「対照語用論」(堀江 2016)の分析手法を用いた。

4. 研究成果

本研究の主要な成果は以下の通りである。

(I) 日本語においては、「文末連体構文」と「文末名詞化構文」はいずれも述語の位置に生起し、動詞や形容詞、形容動詞の代わりに用いられるという生起位置の共通性があり、いずれも表面的に[修飾節+名詞]という構造的な類似性がある。その一方で、文末連体構文は「新情報の提示、臨場性の表象、文末の動詞述語の繰り返しの回避」などの語用論的機能を担っているのに対して、文末名詞化構文は主として「モダリティ、アスペクト、エビデンシャリティ」などの特定の文法的意味を表象している。

(II) 「文末名詞化構文」に関しては、韓国語においても、日本語の「の,もの,こと,ところ」などに対応する名詞化辞(依存名詞)「kes」を主要部とする「kes-ita(およびその変異形 ke-ya, kes, ke 等)」を主要部とし、その直前に修飾節が来る、日本語と平行的な構造を有する構文が一定数存在している。ただし、日本語との顕著な相違点として、これまでの代表者の研究が明らかにしてきたのと同じ日本語との対比が見られた。具体的には、日本語の場合、「の」「もの」「こと」「ところ」などの中核的な名詞化辞は文中においても接続助詞や接続詞を構成しており、生起位置が文末に限定されておらず、文末において特定のモダリティ、エビデンシャリティ機能を発現している。

これに対して、韓国語の場合、「kes」のように文中で「補文化辞」の機能を果たしつつ文末名詞化構文としても用いられるものは少なく、殆どは文末名詞化構文に特化しているという点で機能的に拡張があまり見られない。また、金(2003)の研究が明らかにしているように、日本語が文末名詞化構文を用いる際に、韓国語においては動詞述語が用いられる場合も少なくない。

表される文法的意味の種類に関しては、全般的にモダリティ(義務、当為、推量)を表す形式が多いが、両言語でエビデンシャリティ(ある推論に導く何らかの証拠(未指定)の存在を示唆)を表す形式(「の(だ)。」; ke(s-ita).」が共通して見られ、アスペクト(例:経験相)を表す形式も見られる(「ことがある」; il(cek)-i issta)」共通して見られた興味深い現象として、「ところ」は前接する動詞連体形のテンス・アスペクトによって「~ているところだ。」(進行相)「~たところだ。」(完了相)「~るところだ。」(proximative)のような分化が見られるが、韓国語では「kes-ita」において、前接する動詞連体形が未来形である場合(推量モダリティ)、現在・過去形である場合は(エビデンシャリティ)という分化が見られた。韓国語においては、文末名詞化構文に用いられる「依存名詞」の中で非常に機能が限定され、必ずしも生産性の高くない形式が多く見られるが必ずしも使用実態が十分に分かっておらず今後の追加調査が必要である。さらに、日本語と比べた場合、韓国語においては全般的に「文末連体構文」の生産性は低いように見受けられるが、本研究では十分な対照を行うことができなかったため今後量的な観点からの検討が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)  
〔雑誌論文〕(計 26 件)  
(以下主要なものを掲載)

- Horie, Kaoru. (2017) "The attributive versus final distinction and the manifestation of "main clause phenomena" in Japanese and Korean noun modifying clause constructions." Amsterdam: John Benjamins. Matsumoto, Yoshiko et al. (eds.) *Noun-modifying Clause Constructions in Languages of Eurasia*. Amsterdam: John Benjamins, 45-57.
- 朱氷・堀江薫 (2017) 「束縛的モダリティと必要条件文の関連 中国語・日本語・韓国語の対照を通して」『言葉と文化』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科) 18, 38-44.
- 楊 竹楠・堀江薫 (2016) 「構文のスキーマ性に関する対照言語学的研究—中国語と日本語の分裂構文の対比を通して—」『日本認知言語学会論文集』(日本認知言語学会) 16 巻, 266-277.
- 京野千穂・堀江薫 (2016) 「上昇調のネガノダ文と非ノダ文に付く場合 - 意味機能の異なり」『音声研究』(日本音声学会) 20.2, 1-9.
- 堀江薫 (2016) 「対照語用論」加藤重広・滝浦真人 (編) 『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房, 133-157.
- 市村葉子・堀江薫 (2015) 「若者の自然会話における「の(の)」の伝達的機能—男女間の使用差と「んだ(の)」との機能分担に着目して」『語用論研究』(日本語用論学会) 16, 57-66.
- 勝田順子・堀江薫 (2015) 「マレーシア語のパーティクル kan の多機能性 文法化の観点から—」『関西言語学会論文集』34, 61-72.
- 朱氷・堀江薫「中国語のモーダルマーカ―必須(bìxū)」の節連結機能 - 文法化と機能拡張の観点から -」『日本認知言語学会論文集』(日本認知言語学会) 15, 422 - 433.
- Hamlitsch, Nathan, and Kaoru Horie (2015) "A Usage-Based Approach to Abstract Loanwords in Japanese: A Case Study of *Taimu*" 『日本認知言語学会論文集』(日本認知言語学会) 15, 79-89.
- Ryu, Juyeon, Yasuhiro Shirai, and Kaoru Horie (2015) "The L2 Acquisition of the Korean Imperfective Aspect Markers -ko iss- and -a iss- by Japanese Learners: A Multiple-factor Account." *Language Learning* 65.4, 791-823.
- Moriya, Tetsuharu, and Kaoru Horie. (2015) Neg-raising as a Product of Grammaticalization." In: Smith, Andrew D.M. et al. (eds.), *New Directions in Grammaticalization Research*. Amsterdam: John Benjamins, 121-134.
- 堀江薫 (2015) 「日本語の「非終止形述語」文

末形式のタイポロジー - 他言語との比較を通じて—」益岡隆志 (編) 『日本語研究とその可能性』開拓社, 133-167.

- 呉守鎮・堀江薫 (2014) 「韓国語の文末名詞化構文「-KE(S)」の文法的位置づけと語用論的意味 - 日本語の文末名詞化構文との対比を通して -」『関西言語学会論文集』35, 49-60.
- Horie, Kaoru, and Heiko Narrog. (2014) "What Typology Reveals about Modality in Japanese. A Cross-linguistic Perspective." Amsterdam: John Benjamins, 109-133.
- 堀江薫 (2014) 「文末名詞化構文の相互行為機能—日韓語の自然発話データの対照を通じて—」『解放的語用論への挑戦』(くろしお出版), 37-55.
- 堀江薫 (2014) 「言語類型論・対照言語学から見た日本語複文研究の動向と課題」益岡他 (編) 『日本語複文構文の研究』(ひつじ書房), 545-558.
- 堀江薫 (2014) 「主節と従属節の相互機能拡張現象と通言語的非対称性」益岡他 (編) 『日本語複文構文の研究』(ひつじ書房), 673-694.
- 堀江薫 (2014) 「モダリティの類型論」澤田治美 (編) 『意味論講座第 3 巻 モダリティ I: 理論と方法』ひつじ書房, 43-62.
- 〔学会発表〕(計 31 件)  
(以下基調講演のみ掲載)
- Horie, Kaoru. "Language Contact, Linguistic Typology, and Cognitive Linguistics: A Cognitive Typological Analysis of 'see' in English, Japanese, and Korean." Hankyuk University of Foreign Studies Linguistics Colloquium, 2017.2(韓国外国語大学, ソウル市, 大韓民国)
- 堀江薫・ハイタリー「内の関係」と『外の関係』の名詞修飾節の通言語的バリエーション: クメール語・日本語・英語を中心に」国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「名詞修飾表現の対照研究」第 1 回研究会, 2016.11 (名古屋大学, 名古屋市)
- Horie, Kaoru. "Differential Degrees of Retention of Lexical Meaning in Japanese and Korean Functional Categories: A Typological and Constructional Approach." The 24<sup>th</sup> Japanese/Korean Linguistics Conference, 2016.10 (国立国語研究所, 立川市)
- 堀江薫「日本語と韓国語の「主節」と「従属節」-言語類型論の観点から-」第 250 回朝鮮語研究会記念シンポジウム「言語学と朝鮮語」, 2016.9(東京大学駒場キャンパス)
- 堀江薫「非従属節」の類型論—日本語・英語・韓国語・インドネシア語・フィンランド語の事例に基づいて—」第 8 回 奈良女子大学文学部 欧米言語文化学講演会(言語学), 2016.8 (奈良女子大学, 奈良市)

堀江薫「日本語の名詞修飾節の「ウチ」と「ソト」-主節現象・主節化に関して□」国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「名詞修飾表現の対照研究」第1回研究会, 2016.7 (神戸大学, 神戸市)

堀江薫「「非従属節」のタイポロジー-言語類型論研究と「言いさし」研究の接点-」第70回 NINJAL コロキアム, 2016.6 (国立国語研究所, 立川市)

Horie, Kaoru. "Noun-modifying Constructions in Japanese: Structural Under-specification and Pragmatic Utility." International Symposium on Noun-Modifying Expressions in South Asian Languages." 2015.12(デカン大学、プネー市(インド))

Horie, Kaoru. What do cross-linguistic studies reveal about Japanese? -Linguistic Typology and the Japanese Language-." International Conference on the Japanese Language and Cultural Studies in Pune: Past, Present, and Future. 2015.12 (プネー市, インド)

Horie, Kaoru. Grammaticalization Phenomena in Korean and Japanese: Parallelism and Divergences." 2015 Summer Joint Conference of the Linguistic Science Society, the Korean Association of Language Sciences, and the Mirae English Language and Literature Society (conference theme: "Variousness and Uniqueness of Cross-Linguistics"), 2015.8 (釜山国立大学, 釜山市, 大韓民国)

Horie, Kaoru "Genre-specificity of some grammaticalization processes in Korean: A contrastive study with Japanese." 国立国語研究所国際シンポジウム「文法化：日本語研究と類型論的研究」2015.7 (国立国語研究所, 立川市)

堀江薫「言語類型論・認知言語学の観点から見た日本語の複文現象および複文研究の動向 - 他言語との対照を通じて - 」2014年度輔仁大学日本語文学科『国際シンポジウム新旧の会うところ—日本語文法の理論と実践—』2014.11 (輔仁大学, 台北市, 中華民国)

Horie, Kaoru. "Linguistic Typology meets Cognitive Linguistics and 2nd Language Acquisition: A Case Study from Chinese and Japanese Speakers Learning English." 2014.11 (国立臺灣大学, 台北市, 中華民国)

〔図書〕(計 4 件)

Horie, Kaoru and Yasuhiro Shirai (eds.) (2015) *Studies in Language Sciences*. 14. 開拓社 (264 頁)

Horie, Kaoru (ed.) (2015) 『認知言語学研究 1』開拓社 (244 頁)

益岡隆志・堀江薫他(編)(2014)『日本語複文構文の研究』ひつじ書房 (721 頁)

Shirai, Yasuhiro, and Kaoru Horie (eds.) (2014) *Studies in Language Sciences*. 13. 開拓社

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

堀江薫 (HORIE, Kaoru)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号：70181526